三田文學

九月

大正十五年四月二十四日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）昭和十七年八月二十日印刷納本　昭和十七年九月一日發行　第十七卷　第九號

人形物語（4）

花柳章太郎

『初代門十郎のこと』

初代門十郎は人形淨瑠璃の元祖淡路島鮎原の出身。二代目も淡路の人で中田村出身で大阪へ登り、桐竹と云ふのはその姓であり、正德元年（二百年以前）の家元で女形遣ひの家元である。

二代目門十郎は始め大阪に居て認められず上、京して藝を磨き、忠臣藏九段目のおりんを勤め、それが認められずば人形遣ひをやめる決心をして、その女形のちやり遣ひを研究してついに成功し、名をなして大阪へ歸へり、門を紋に改めて紋十郎の初代となつた譯である。

初代門十郎、二代紋十郎共に淡路出身の人形女形遣ひの名手として知られ、紋十郎は吉田辰次に比べて世話がゝり、寫實な演出をして一家をなした。玉造と共に明治時代のをやま遣ひの名人で他に立役にも秀でた大立物であつた。明治四十三年八月十五日歿。

玉造、紋十郎の話に夜は更けたので、一先づ福舛を出ることにした。

宵の間の雨も蒸し暑かつた爲めであつたらうか、戸外へ出て見るとさすが九月半ば、寢靜まつた町家は、どこも戸を閉ざし、笠屋町のアスハルトの上へ冴え〴〵とした十五夜の月が皎々と光りを投げて居る……。

「天ぷらを喰ふ間に晴れし時雨かな」

久保田さんの句にこんな實感のある句をフト思ひ出した。

相生太夫は周訪町なので、八幡筋で別れた。私と榮三師は二人並んで東へ歩き出す。家内と妹は二人の話の邪魔にならないやうにあとから從いて來たらしい。

「天ぷらを喰ふ間に晴れし時雨かな

成る程、俳句ちゆうもんは、何んでも無ふ詠んで居てチントその氣分が出ますな。わては發句をよう詠みへんが、あんたはやらはりまつしやろ。」

自分も二十代にその頃の句樂會小山内、久保田、吉井、長田、服部、落合、結城、岡村、なぞと云ふ玄文社（新演藝發行者）連に可愛がられて、門前の小僧式にその運座に列して居たことがある。

その後大震災でショックを受け、そうした詩想が枯れてし

まつたが、現在でも時々、駄句を作つて居るので、それを話しながら堺筋の電車通りを越した。赤電であらう、まばらに乘つた人影を灘波の方へレールを響かせて走り去つた。

終電のつれなくすぎぬ夜半の冬

小山内先生の句である。

「終電のつれなく過ぎる、なる程、さうでんな、あてらの若い頃は電車はなし、どこへ行くにも歩かんならん。文五郎はんなぞ、住吉から松島の文樂迄毎日歩いてかよつた。何せその時代は、六時には芝居が開きますよつて、もう五時には小屋へ入つておらんと用事が出來しまへん。そやよつて、住吉近くの家やつたら、夜中に家出んことにはあきまへん。部屋へ行つて火をオコしてお湯わかし、部屋の掃除や人形の世話してるうちに冬場は夜があける。それからボツ〳〵他の役者はんが來やはる時刻になるちゆう譯で、電車のやうな便利なものはおまへなんだ。」

私は自分の經驗で役者になつた十六の年、打出しが初日はどうしても十二時をすぎる。時によると午前一時半頃になる時もあり、見物も勿論歩いて歸へる譯だが、私共下廻りは、それから部屋を片附けて居ると二時を過ぎる。新富座に多く新派がかゝつて居たので、本郷の天神下迄歩くと二時間はどんなに急いでもかゝるので、家へ着くのが五時にはなる。九時から學校が始まるので二三時間しか眠られない經驗はある。

「あての時代は歩かんならん。貴方は電車、近頃の弟子達は自動車。だん〳〵世の中が違うて來る。文樂も若い者が皆轉業する者が多くて困ります。又辛抱しとる者は應召されてお國の爲めに働きに戰地へ征く。近頃はテンとあとから人形遣ひになるもんがおまへん。これでは文樂も私等が死んだらドナイなることか。まア〳〵自滅するより他ありませんな。近頃のやうな世の中では人形役者になつて十年も足遣ふなんて、根氣のある者はまアおまへんやろ……。」榮三師は月に向つて、文樂の行末を嘆じ、一つ二つ咳をした。片側の暗い家並からキリギリスの鳴く音がする。冷え〳〵とした風が水のやうに二人の頬を撫ぜて行つた。

たゞみれば、何んの苦もなき水鳥の
　　足にひまなき、わがおもひかな

やんごとないお方の歌を引例にしては申譯もないことではあるが、太夫、三味線、人形遣の右左共に觀る人に、その巧拙がわかるだけでも報はれる點はあるけれど、その中で足遣の人程世にむくはれぬ者もまアあるまい。

水鳥の水に浮かんで居るところは眞に悠々とした姿であるけれど、水に隱れた足は常に休む暇とてなく働くのである。

舞臺の上で喝采された役者の板一枚下の奈落では、幾人かその廻し舞臺をまはす人達が居る譯だ。それ等の人達の陰の助力があつて始めて舞臺の役者が生きるので、一つの人形を

操る中で足遣ひの人程、世にも報ひられぬ者はないのである。

『足遣ひ拾年』

足遣ひに及ぶ迄に人形役者の修業は、出道具をそろへる者又横幕の出入にかゝる者、それ迄二三年は見習ひ中にさせられる。何んでもなく見ゆる人形の動きも頭、と右手を主役の役者がつかふ他左手遣ひと足づかひの三人が一體になつて一人の人形を操るものだけに、その三人が呼吸が合ふ迄には實際なみ〳〵ならぬ苦勞があるのだ。

電車通りを東に鍛冶屋町筋迄丁度來かゝると、榮三師は思ひ出したやうに、

「あてが初舞臺を踏みましたのは、この筋日本橋北詰、ほらあこに見えるこんもりとした大きい楠がおまつしやろ。あこに松島の文樂の小さいやうな「澤の席」ちゆう小文樂と云はれる人形芝居がおました。明治十六年六月に柿葺落の芝居で染太夫（越路太夫と覇を爭つた名人）春子太夫（後大隅太夫）源太夫（先々代）朝太夫、三味線は廣助（松葉屋）（後越路太夫の三味線）新左衞門（初代）、人形は吉田辰五郎（三代目）東十郎、小花造（後三吾）駒十郎（後四代目辰五郎）はん等の一座で、狂言は太功記の通しに御祝儀三番叟、布引の四段目だした。あては光榮ちゆう名で出ました。

柿葺落しの番附を見ますと「宗祇坊」や「三法師丸」の役がついてますが、なか〳〵初舞臺からそないな役つかへまへん。役どころか足も遣ひまへん。横幕（上下の揚幕）の開けしめ、蓮臺（人形舞臺で小道具を置く臺）の出入れ、舞臺の下駄を揃へたりするのが役だした。

丁度五六日目の事やつたと思ひます。豐松東十郎はんが三番叟を遣つて居られ、最初四人上段で構え動きになつて船底（人形の舞臺は上下二段になり、その下の方の舞臺）へ降りしなに舞臺下駄を履かれたのだすが、下駄を揃へる役がわての役目だす。それをうつかりしてまして、右左を間違へて（舞臺の人形遣の下駄は左右に印がつけてある）揃へました。

するといきなり船底に蹲つて居るわての向脛をぽーんと蹴られました。その修業の嚴しさ、今とはてんと比べものになりまへん。」

三宅周太郎先生著の「文樂の研究」の人形遣さま〳〵に依ると「玉造の弟子現文樂の頭取、玉次郎十七歳當時の話に、攝津大椽の阿波の鳴戸で十郎兵衞を使つた當時である。その捕物の立廻りで玉造は珍らしく本身の刀を使つた。その時玉造の足を使つて居た。とある日立廻りで間を外した事があつた。すると玉造は舞臺でぽんと刀で玉次郎の頭をなぐつた。

幕が閉まると頭の後ろが血まぶれである。それを直に玉助の後の二代目玉造が見兼ねて玉造に注告した。いくら嚴格にするとは云へ、頭を切るのは少し手荒いと云つた風に述べた。と、玉造はカッと憤つた。そして玉次郎

た。と、玉造はカツと憤つた。そして玉次郎を呼びつけ、「それ位の折檻は當然だ……さう云ふ辛抱が出來ぬのなら、二人共破門する」と迄云つた。

玉助と玉次郎とはあべこべに恐れ入つてお詫びをする外なかつた。かうして玉次郎の頭の疵は、實に舞臺での叱正によるものなのである。所が、一方吉田辰五郎に仕へた榮三も同じ十何歳の少年時代であつた。

彦六座で辰五郎が「安達」の「貞任」を使つて居た。榮三はまだ足も持てずにツケを打つて居た。と、貞任の見得の度に榮三の打つツケが巧くいかない。子供ながら榮三はひどく苦しんで居た。併し辰五郎は何も云はない。樂屋へ入ると、お前のツケの打ちやうは間違つて居る、が、その中にイキが分つて來るだらうと云ひつつ舞臺では榮三のツケに合はすやうに辰五郎の貞任の方で乘つて行つたさうである。……とあり、明治期の二人名人のゆきかたの相違が記るされてある。

私が去年（昭和十六年七月新橋演舞場所演）の前申のべた通り小鍛冶を榮三師が遣つた時、弟子の榮三郎が足を使つた。その足のうまかつたことを話をしたら榮三師はニヤ〳〵して居た。左使ひばかりして左使の名人も居れば、又、足で終る人もある。兎に角足遣ひだけで十年以上修業を固めなければ、人形遣ひとしての修業は一人前に缺ける譯になる。

（この項つづく）

宮內省御用達
株式會社 東洋軒
電話銀座（57）五七五一 五七五二 五七五三
赤坂山王下
高級割烹 錦水
電話赤坂（48）〇九二一 〇九二七 一四一一

東洋軒支店
□日比谷三信ビル八階食堂
定食 晝、一、四〇 晩 二、〇〇
電話銀座（57）五七五一—三迄
□日比谷三信ビル地階食堂
輕い食事 定食 一、〇〇
□赤坂三會堂內
支那料理 電話赤坂（48）〇、〇一七

編輯後記

△小説「兄と弟」は青木年衞君の本誌への第二作である。曩に、第一作を發表以來、その健實な作品は世評を得た。久し振りに鳥居君の戯曲「距離」（一幕）が送達された。水上先生御在世以來、明石にあつて孜々として創作を怠らぬ努力家である。眞下君の小説「原價計算」と共に三篇。御批判を得たい。「詩」は乾君と高祖君の清新な二篇。

▽評論は矢崎君の續稿と、モームの「支那の屏風」を譯出した鷲巢君は、塾英文科の教職にある若き英文學者である。一葉研究者として一家の見識を持つ和田君に「一葉の新資料」を、提呈して貰つた。一葉ファンにとつて新たな喜びであるに違ひない。「久保田万太郎句集を讀む」は、俳壇の新人深川正一郎氏の俳論とも見らるべきものであらう。

▽俳句は石塚友二、加宮貴一兩君の出場を煩はした。此欄は中々好評を得てゐる樣である。

▽横山君の「書物挿索」、花柳章太郎さんの「人形物語」――それぞれ、興味ある一文である。戸板君はこれまでの勞作をまとめ「俳優論」として上梓するといふ。

▽例年の如く十月號を「美術特輯號とする筈であつたが、「美術」の名に於て秋の展覽會を見逃し難いので、來月號を「創作特輯」とし、それに新進詩人の「愛國詩」を加え九月二十五日刊行し、從つて「美術特輯」を十一月號とする事にした。圖版を多く、第一輯にも優るべき出來得る最大な豪華版として十月二十五日に發賣の豫定で、目下著々準備中である。部數に制限があるから、御希望の方は（特價一圓、送料四錢）直接本社に前金豫約されるか書店に豫約されると御便宜と考へる。

▽「三田文學出版部」の近刊は三宅三郎君の「歌舞伎劇鑑賞」である。これは豫期の如く好評である。秋にかけて刊行豫定のものは小島政二郎著「眼中の人」（長篇小説）、小林一三著「芝居ざんげ」（映畫と芝居の隨筆集）、馬場孤蝶著「明治文壇の人々」（隨筆集）、折口信夫著「古代研究」、太田咲太郎著「ゾラとセザンヌ」（評傳）佐藤春夫著「ひとりすみれ物語」（評傳）で、大部分目下校正中であるから、九月下旬から十月にかけて出版部も活況を呈する事だらう。ついで、幸田成友先生、吉田小五郎君の著作も上梓の豫定である。

▽既刊本の何れも好評で、わが出版部の企畫が從らに時流に媚びず、賣哉主義的のものでない點、名實共に出版部の名を辱かしめないのを聊か誇り得るのを喜ぶものである。

▽三十何年振りとかいふ暑さも、漸く峠が見えた秋風都内を訪れるのも間もなからう。折角愛讀諸家の御健勝を禱る。

和木清三郎

停 定價 金五拾錢（郵稅三錢）

昭和十七年八月二十日印刷（毎月一回）
昭和十七年九月一日發行（一日發行）

東京市芝區三田 慶應義塾内
編輯者 和木清三郎
發行者 西脇順三郎
東京市芝區愛宕町二丁目十四番地
印刷者 渡邊丑之助
東京市芝區愛宕町二丁目十四番地（東京一二五）
印刷所 愛宕印刷株式會社
電話芝二八八六、四三二〇

東京市芝區三田慶應義塾内
發行所 三田文學會
振替口座東京三七五〇五
東京市神田淡路町二ノ九
配給元 日本出版配給株式會社

購讀料金

普通號一部	五十錢	二錢
半ヶ年	三圓五十錢	稅共
一年分	七圓	稅共

□右購讀料金は一ヶ年四回發行する定期特輯號料金を加算いたしたものであります。

□一月、五月、八月、十一月號を定期特輯號といたします。

□尚、臨時特輯號發行の場合はその都度既納購讀料より差額を申受けます。